

『痛みと感情のイギリス史』と Early English Books Online

伊東剛史先生、後藤はる美先生、那須敬先生 座談会より抜粋

気鋭のイギリス史研究者のお三方に、最新のご著書と Early English Books Online についてたっぷりと語って頂きました。本稿では座談会の様子を抜粋してお知らせします。座談会の全文は[こちら](#)でお読みください。



実施日、場所:2016年10月24日、国際基督教大学

ゲスト:東京外国語大学 伊東剛史先生、東洋大学 後藤はる美先生、国際基督教大学 那須敬先生

聞き手(以下、Q.):紀伊國屋書店



『痛みと感情のイギリス史』

Q. ご著書の内容を、簡単に教えて下さい

伊東先生「一言でまとめれば、痛みとは何かという問題を、歴史学の視点から明らかにしようとしたものです。あるいは、痛みという一見、歴史を超越した現象に関して、その歴史をいかに書くことができるのかに挑戦したものです。痛みというのは、ほぼ誰もが経験したことがあって、誰もが理解していることのように感じられますが、実際には痛みとは何かを定義しようとすると、本当に難しいです。…一方で、痛みとは、「生きる」ということと対になるという考え方もあって、例えば最近ではとくに、他者の痛みへの共感が、わたしたちの社会にとって重要な感情であると言われるようになってきました。でも、痛みがわたしたちの生に対して根源的な問いを投げかけるという理解は、もしかしたら歴史を通して不変だったわけではなく、比較的新しく出てきたものかもしれません。そこで、本書は、わたしたちを取り巻く痛みに関する価値判断や行動規範を一度棚上げして、例えば、今日痛みを説明することについて支配的な医科学による痛みの理解が、どのように形成されたのかを明らかにしようとしています。

…さらに、痛みは実際には間主観的な経験であって、単純に自分が痛いということだけではなくて、痛いということを他者、神様、あるいは自分自身に向かって発信することによって、ひとつの経験として成立するということが、わかってきます。

こうした問題について、6人の執筆者が17世紀から20世紀初頭までのイギリスに6つの舞台を設定し、それぞれ具体的な事例を通して、痛みの歴史性に迫ったのが本書です。」

近刊『痛みと感情のイギリス史』 2017年3月、東京外国語大学出版会より出版予定

《目次》

- 無痛症の苦しみ(伊東剛史)
- 1 神経 医学レジームによる痛みの定義(高林陽展)
- 2 救済 19世紀における物乞いの痛み(金澤周作)
- 3 情念 プロテスタント殉教ナラティブと身体(那須敬)
- 4 試練 宗教改革期における病と宗教実践(後藤はる美)
- 5 感性 18世紀虐待訴訟における挑発と激昂(赤松淳子)
- 6 観察 ダーウィンとゾウの涙(伊東剛史)
- ラットの共感?(後藤はる美)
- 痛みと感情の歴史学(伊東剛史/後藤はる美)





"EEBO は図書館"



Q. 本日のもう一つのテーマである [Early English Books Online \(EEBO\)](#) についての質問に移らせて頂きます。EEBO は 17 世紀以前のイギリスの印刷刊行物を収録するデータベースです。今回の本の執筆にあたって EEBO をご利用頂いたと伺っていますが、具体的にどのような調査に使われたのでしょうか

那須先生「我々 17 世紀のイギリス史をやっている研究者にとって EEBO とは、British Library のリーディング・ルームに座るみたいなことなんです。リクエストすればなんでも出てくる。それに置き替わったという感じだね」

後藤先生「うんうん」

那須先生「だから、何にせよ調査を始めるときには、まず EEBO を引く。二次文献を読んでいて、面白そうな一次史料を使っていると思ったら、すぐ EEBO で確認する。EEBO は図書館なんです。まず図書館に行くようにまず EEBO。そういう感じですね。

今回の『痛みと感情のイギリス史』では私は、1650 年代に大逆罪で処刑されたクリストファー・ラヴという一人の牧師と、その死の描写の分析からチャプターを始めています。処刑シーンの再現に、EEBO は不可欠でした。重要な裁判や公開処刑の場合、ニュース・パンフレットなどの一連の報道印刷物があります。全て EEBO にあります。ラヴが処刑台の上から群衆に向かって何を語りかけたか、神に何と祈ったか、それも EEBO にあります。それから恩赦を求めてラヴの友人や家族が議会で嘆願書を提出する、それも EEBO にあります。処刑が実際に行われたあと、政治指導者たちや目撃者たちが事件をどう記憶したか。ヒントとなる史料がかなり EEBO に残っています。もちろん EEBO だけで史料集めが完結するわけではありませんが、活字になって現存するものはほぼ全てであると考えていいので、そういう意味で、きわめて強力なツールですね。」・・・



教育が変わる、研究のスピード感が変わる

Q. ……近年の資料の電子化に進展に伴って、先生方の研究手法には変化があったでしょうか？

後藤先生「デジタル史料の導入で変わったと感じるのは、研究のスピード感。…一つのデータベースで完結せず、それを使いつつ、ハードな書籍も含めて色々なところに繋がって、またデータベースに帰ってくるという循環で、研究が進んでいく。全体として、今まで本のページをめくって、ノートをめくってやってきたこととは、だいぶ違うスピード感がありますね。

ただ、EEBO のような一次史料データベースは、最先端の「専門図書館」のようなもので、その図書館が本当の意味で「使える」かどうかは、その他のリソースと、それを使いこなすリテラシーにかかっています。」・・・

⇒座談会の全文は下記のサイトでお読み頂けます。<http://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/chadwyck/umi/eebotalk.htm>

掲載の商品・サービスに関するお申し込み、お問い合わせは、株式会社 紀伊國屋書店 データベース営業部
(電話:03-6910-0518、ファクス:03-6420-1359、e-mail:online@kinokuniya.co.jp) までお願い致します。

お預かりした個人情報は、弊社規定の「個人情報取扱方針」<http://www.kinokuniya.co.jp/06f/gaiyo6.htm> に則り、取り扱わせて頂きます。